

# 美 術 科

# 美術科の本質

## 豊かな情操

- ・生涯にわたり美術を愛好する心情
- ・美術文化の継承と創造への関心
- ・形や色彩などによるコミュニケーションを通して生活や社会の中の美術と主体的にかかわる態度

創造活動の喜び  
自己実現の積み重ね

豊かな感性の醸成

美術の創造活動

### 言語活動の充実

新たな見方や考え方に気づき、自身の見方や考え方を広げる

### 発想や構想の能力

- ・感じ取ったことや考えたことから主題を生み出し、主題などを基に表現の構想を練る能力
- ・伝える、使うなどの目的や機能と美しさを考え、表現の構想を練る能力

自己決定と課題解決、そして自己実現へ

## A 表現

### 〔共通事項〕

- ・形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること
- ・形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること

### 言語活動の充実

新たな見方や感じ方に気づき、自身の見方や感じ方を広げる

### 創造的な技能

- ・材料や用具を生かして、表現意図に合う方法を工夫するなどして創造的に表現する技能
- ・材料や用具、表現方法などを総合的に考えて、見直しをもって表現する技能

### 知識・視点 感性の育成

### 鑑賞の能力

自分の見方や感じ方を大切にして、作品などの意味や価値を考え、造形的なよさや美しさなどを感じ取り味わう能力

- ・造形的なよさや美しさ
- ・生活を美しく豊かにする美術の働き
- ・美術文化

## B 鑑賞

美術への関心・意欲・態度

題材との出会い

生徒や学校、地域などの実態

生徒の生き方

## 美術科の本質について

美術科の本質は、「中学校学習指導要領解説 美術編」の教科の目標にもあるとおり、全ての生徒に「豊かな情操」を養うことを実現するために、表現及び鑑賞の創造活動を通して「美術の基礎的な能力」を育成し、生徒がそれらの資質や能力を汎用して、試行錯誤しながら課題解決するとともに、自己実現を積み重ねることで、創造活動の喜びを味わわせるところにある。美術教育には表現のための技法の習得や美術を理解するために必要な知識の獲得を目的とする「美術の教育」と、美術の活動を通して人間形成を図る「美術による教育」という二つの側面がある。「豊かな情操」を養うためには、「美術の教育」を手段とし、「美術による教育」を目的として、そのどちらの側面も適切に関連させ、両立を図っていくことが必要であると考えられる。

## 美術科で育成する資質・能力

前述のとおり、美術科は全ての生徒に「豊かな情操」を養うことを目標としている。情操とは、美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心である。それは、知性・感性・徳性などの調和の上に成り立ち、豊かな精神や人間としての在り方・生き方に強く影響していく高次の資質・能力といえるものである。また、「生涯にわたり美術を愛好する心情」や「美術文化の継承と創造への関心」、「生活や社会の中の美術と主体的に関わる態度」など、学校教育を離れ、社会をよりよく生きるために必要な能力を内包するものと捉えている。その「豊かな情操」を養うためには、左図の通り「創造活動の喜び」を美術の表現及び鑑賞の全過程を通して、実感的に味わわせることが大切である。そして、「創造活動の喜び」は生徒が「自己実現を積み重ね」る充実した過程の中で得られるものである。

それでは、自己実現とは何だろうか。美術教育概論（大橋 功他編著）では自己実現とは「自ら探究、追求に値する課題（価値）を発見し、創造的に解決（価値実現）に向かい、人間としての全体的な統一性をもった成長」としている。「中学校学習指導要領解説 美術編」の教科の目標にある、「表現活動においては自己の心情や考え、イメージを基に自分が表現したいことをしっかりと意識して考え、それが自分の表現方法で作品として実体化していくこと」、「鑑賞活動においては自分の見方や感じ方に基づいて想像力を働かせて見ることで、作品に対する見方が深まり新たな発見をしたり感動したり、自分にとっての価値をつくりだしたりすること」がそれに当たるであろう。美術の創造活動の全過程の中で、「美術への関心・意欲・態度」を基に、「発想・構想の能力」や「創造的な技能」、「鑑賞の能力」などの美術の基礎的な能力を、〔共通事項〕を互いの視点として相互に行き来しながら高め合うことで、自己実現につながるのである。

## 美術科の本質に迫る授業づくり

美術の創造活動を通して育成する資質や能力を生徒に身に付けさせるためには、様々な題材を通して、付けるべき力を明確にした授業づくりをしていくとともに、生徒や学校、地域などの実態に応じてより生徒が学びやすい活動が設定され、生徒一人一人が題材を自分のものとして捉えていけることが必要である。また、表現と鑑賞の能力を相互に関連させながら高めていくために、発想や構想、鑑賞活動など感性を働かせて思考・判断していく場面では、自分の見方や考え方、感じ方を大切にしながらも、〔共通事項〕の視点を持ち、言語活動を通して、新たな視点や価値に気づき、自分の見方や考え方、感じ方を広げていくなど、本質に迫る授業づくりを実践していきたい。

## <参考・引用文献>

中学校学習指導要領解説 美術編 文部科学省（平成20年9月）

中等教育資料「育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にした美術、工芸における授業づくり」

東良雅人（平成26年5月～）

大橋 功他編著「美術教育概論（改訂版）」日本文教出版、2009年

福田隆眞他編著「美術科教育の基礎知識（四訂版）」建帛社、2010年

**実践事例**

**1 題材名**

第3学年 附属中グッズ化プロジェクト

【A表現(2)イ, (3)イ】【B鑑賞(1)ア】

〔共通事項〕ア,イ

**2 実践内容**

(1) 題材設定の趣旨

私たちの日常生活の中には様々な人工物があふれている。その人工物のほとんどは、誰かがデザインした物であり、私たちはそのデザインされた物から機能的なよさのみならず、形や色などの美しさも感じ取り、自分の生活に取り入れ豊かにしている。すなわち、美術の創造活動の中でも、デザインに表現する活動とは、目的や条件を基に相手の立場に立って、美しい、使いやすいといった感性的な価値や美的感覚と知との調和を考えることができる活動であるといえる。

本題材は附属中学校をテーマに、より附属中学校が感じられるオリジナルのグッズを、表現方法を工夫して制作するものである。シルクスクリーンによる技法を用いて無地のトートバッグやTシャツ、ハンカチにオリジナルのプリントを施していく。1グループ4人のデザインチームを結成し、コンセプトの設定からグッズのデザイン案の検討、版の制作、そして印刷までを行う題材である。題材名にもある通り、「附属中のグッズ化」であるので、グッズを通して多くの人々に附属中学校とはどのような学校であるのかを伝えることを目的に、チームごとに「附属中は〇〇な学校」といった明確な考え(コンセプト)をもった上で、それに応じた絵や文字、その形や大きさ、配置、色彩、構成美の要素などを工夫して相手に伝えたい事を伝えられるように表現していくものである。

(2) 題材構成

次	主な学習内容	配時
1	○作品(商品)の鑑賞をする ・市販されている商品の鑑賞を通して、描かれているものを根拠によさや美しさを捉える	1

2	○個人でグッズのコンセプトを考える ・シンキングツールを利用して伝えたい附属中の姿について考える。 ○個人のコンセプトを基にチームを編成する。 ○チームのグッズのコンセプトをまとめる ・個人のコンセプトからチームのコンセプトにまとめていく ○チームのコンセプトから附属中グッズのデザインを考える ・コンセプトに応じた絵や文字、その形や大きさ、配置、色彩、構成美の要素などを工夫してデザイン案を考える	3
3	○ポスターセッション ・ポスターセッションを通して、伝えたいことを効果的に表すために必要な工夫について考える ○ポスターセッションを受けて制作するグッズのデザインの確定やデザインの修正をする	3
4	○下絵を基にシルクスクリーンの版を制作する ○版をグッズに印刷する ・材料や表現方法の特性を生かし、順序を考えて制作する	5
5	○各チームのグッズの鑑賞をする ・各チームの作品を鑑賞し、美しく、分かりやすい表現や工夫を感じ取る。	1

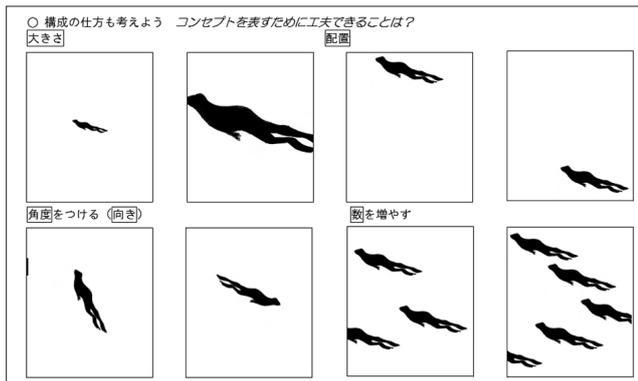
**3 指導上の工夫**

(1) 生徒が自分のものとして捉えることのできる題材の設定

題材の設定においては、その題材を通して、生徒にどのような力を身に付けさせるのか明確にするとともに、それを全ての生徒が主体的に実現できるように学習内容を考えていくことが必要である。主体的に取り組んでいくためには、生徒一人一人が題材を自分のものとして捉えることができることが大切なポイントである。生徒や学校、地域などの実態や生徒自身の生き方とのつながりを考慮して題材を設定する必要があるということである。本題材は、トートバッグやTシャツ、ハンカチといった生徒にとって身近なグッズに印刷するデザインを自分たちで考え、作るという生徒の興味や関心を引くものであると考え設定した。また、この実践は3年生での活動であり、3年間の経験から



▼②の段階で示した資料（一部）—構成について—



表現活動において、生徒が伝えたい附属中学校像（コンセプト）を多くの人に伝えるための形や色彩、構成などの効果を考えるためには、形や色彩などがもつ性質や、それらがもたらす感情を理解し、表現のイメージを捉えることが必要である。そこでデザインの検討では〔共通事項〕の視点から発想や構想を促すために、グッズのデザインの要素として資料にまとめ、生徒に提示し、それをヒントにデザイン案を考えさせることとした。また、市販されている商品とそこに用いられている構成美の要素が分かる資料も用意し、具体例として示した。

▼③の段階（ポスターセッション）の様子



③の段階は、ポスターセッションを通して、それぞれのデザインチームのコンセプトやそのコンセプトに一致したデザインとなるよう考えを明確にさせるとともに、他のチームの生徒の言葉から自分のチームにはなかった新たな視点や価値に気付かせ、生徒たちの見方や考え方、感じ方を広げていくことが目的である。ポスターの作成では、コンセプトを表すためどのような効果をねらい、グッズのデザインの各要素でどのよ

うな工夫をするのか書かせた。その際、効果の語彙例を提示し、それをヒントに書かせることとした。また、ポスターセッションでは、各チームのデザイン案から何を感じたか、その理由は何かを考え付箋に書かせ、相手チームに渡すこととした。ポスターセッション後は渡された付箋を基にデザイン案を練り合うことで、よりコンセプトとデザインの整合の取れたものになると考えた。

▼③の段階で示した効果の語彙例

<p>効果の言葉（例）</p> <p>穏やかな 柔らかい おおらかな やさしい 堂々とした 誠実な</p> <p>ひたむきな パワフルな</p> <p>さわやかな 親しみやすい</p> <p>のんびりとした 熱心な</p> <p>洗練された シックな</p> <p>変化がある インパクトのある</p> <p>整合性のある 統一感のある</p> <p>分かりやすい</p> <p style="text-align: right;">など</p>
---

4 成果と課題

- ① 前述の通り、本題材はグッズの制作を通して、実生活にある美術の存在の顕在化という側面をもっていった。生活に身近な商品と美術的要素を関連付けて授業で取り上げたことから、授業の最後に生徒に書かせた感想には、「世の中にあるいろいろな商品の中にも美術的な要素があることが分かった」というものや、「商品にも思い（コンセプト）が込められていて、それを表すためにデザイナーが工夫している」などといったものがあった。学校美術にとどまらず、社会の中の美術についても意識させたことは、生涯にわたり美術を愛好する心情にもつながっていくと考える。しかし、この題材で取り上げた生活に身近な商品というのは指導者の経験や知識に偏ってしまう面もある。指導者は常に見聞を広げていく必要があるだろう。
- ② 本実践の最後に、この授業を通して学んだこと考えたことなど生徒に振り返りを書かせた。その中には次のような思いをもっている生徒が見られた。

